



## Alex Kulisiewiczの強制収容所歌集について

|       |                                                                                                                                              |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | <p>言語: jpn</p> <p>出版者: 室蘭工業大学</p> <p>公開日: 2014-06-11</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 坂西, 八郎</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p> |
| URL   | <p><a href="http://hdl.handle.net/10258/3351">http://hdl.handle.net/10258/3351</a></p>                                                       |

# Alex Kulisiewicz の強制収容所歌集について

坂 西 八 郎

## Über KZ-Liederbuch von Alexander Kulisiewicz

Hachiro Sakanishi

Bekanntlich wurden in den letzten dreißig Jahren ohne Unterbrechung in der publizistischen Welt Japans sehr verschiedene Berichte und Dokumentationen herausgegeben, die den unaussprechlich tragischen Zustand und das miserable Schicksal von Millionen Kriegsoffern, und von Millionen Opfern des faschistischen Terrors, der auch in der Gegenwart immer und überall stattfindet, schildern. Und aus verschiedenen Gründen, die sich hier nicht einfach erklären können, erscheint andererseits doch selten eine Publikation, die berichten will, wie man im zweiten Weltkrieg auch in den nazistischen Konzentrationslagern Widerstandsbewegungen organisiert hat, geschweige denn noch immer kaum, ja fast nichts\* von den KZ-Liedern, worin die an der äußersten Grenze der Existenzbedingungen in der Lagerhölle durchaus zu erhalten angestrebte Menschenwürde musikalisch und textlich zum Ausdruck gebracht ist.

Hier ergreife ich eine offiziell mir gestattete kleine Publikationsmöglichkeit, um als ersten Versuch eine Serie KZ-Lieder aufzunehmen, und ich bin da zu gekommen, das Buch der KZ-Lieder von Alexander Kulisiewicz\*\*, einem der ehemaligen Häftlinge des Sachsenhausener Konzentrationslagers, auch in japanischer Übersetzung mit der kleinen Umgestaltung in der Beschreibungsreihenfolge herauszugeben.

Diese übersetzten Texte sollen nach Möglichkeit in der Zukunft verbessert werden durch die kooperative Arbeit von Dichter und Musiker, um damit erst einem guten musikalischen Vortrag zur Verfügung gestellt werden zu können. Das hier behandelte Urbuch ist : KZ-Lieder. Eine Auswahl aus dem Repertoire des polnischen Sängers Alex Kulisiewicz. hrsg.v. Carsten Linde, Verlag Wendepunkt, nach Vorwortsangabe ersch. 1972, Sievershütten, 50 Seiten m. Melodien und Bildern.

Als Anmerkungen zu erwähnen: erstens\*, d. h., eine einzige Ausnahme ist mir bekannt, daß das Moorlager-Lied auf einer in Japan produzierten Schallplatte gespielt und von einem japanischen Sänger mit einem Chór gesungen ist.

\*\*\*) zweitens ist aus kulturgeschichtlichen, volkskundlichen sowie musikwissenschaftlichen Interessen sehr hervorzuheben, daß die umfangreichen Belege, die sich im

Besitz vom KZ-Liedarchiv in Krakow befinden, unleugbar wichtig sind. Das Archiv wurde im Jahre 1945 von Kulisiewicz gegründet und durch seine selbstlose Tätigkeit erhalten. Zur internationalen wissenschaftlichen Unterstützung wird hier auch von mir gerufen! Die Hauptbelege sind folgende:

- über 52.000 Meter Tonband;
- über 14.000 Mikrofilme;
- über 540 polnische KZ-Lieder;
- über 7.500 Seiten der polnischen KZ-Poesie aus 37 Stamm- und Nebenlagern;
- über 800 Skizzen und authentische Malereien;
- 714 Mappen mit den verschiedenen Beziehungen (über 80.000 Seiten Texte).

ポーランドのジャーナリスト、歌手 Alex (正式には Alexander) Kulisiewiczは、1918年にポーランドのクラコウに生まれた。6歳のときから、音楽教師であった母親からヴァイオリン演奏の教育を受け、10歳以降あるジプシー・オーケストラに加入した。間もなくある事故がもとで左手の三指に麻痺をきたし、ヴァイオリン奏者としての完成を断念、口笛奏者其他に転じた。オーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキア領域において演奏家として活動を展開した。特意とするレパートリーは、Franz (Ferenc) Lehár (1870—1948), Johannes Brahms (1833—1897), Antonin Dvořák (1841—1904), Johann Strauß (1825—1899) などであった。ポーランドの若い音楽家集団の組織する各地アンサンブルとの共演や、ベルギーおよびオーストリアの記録映画撮影などに協力したのち、かれはクラコウの、「国際民主主義学生通信社」(Das internationale demokratische Studenten-Presse-Büro)の指導にあたり、作曲家の Stanislaw Hadyna とともに、雑誌「左翼とともに」(prosto z lawy)を刊行した。1937年10月にかれらはこの雑誌を通じて平和宣言を行っている。1939年10月23日に、かれはナチス軍のポーランド占領とともにゲシュタポにとらえられ、「戦争煽動者」としてザクセンハウゼン・オラーニエンブルクの強制収容所に入れられた。この拘禁は5年半にわたったがその間かれは Jean Louis Barrault など、ともに拘禁されていた芸術家たちと一緒に、抵抗運動を行った。その間このようなこともあった——「ユダヤのうぐ

いす」(ユダヤ人歌手の蔑称)として収容所司令部に密告され、SS隊医師の実験に提供された。この医師は、ジフテリア菌を三回にわたりアレックスに注射し、声帯の破壊効果をみようとしたのであった。ドイツ人とチェコ人の抵抗グループはこの注射実験が失敗するように緩和剤を入手した。当時SS側は実験の失敗をみとめた。しかしこの効果はやはり後にあらわれた。数年にわたる拘禁のため、当時かれはほとんど失明状態で、骨と皮だけの体軀に瘦ほそったが、なお音楽家の活動をつづけた。<sup>1)</sup>

Kulisiewicz は、強制収容所で発生したあらゆるうたを記録した。ザクセンハウゼン強制収容所において、かれは51曲(うち21曲は自分の作曲)を編曲または創作し、解放後は716頁の記録を作成した。これらはすべて記憶にとどめておいたものである。1945年から1967年にいたるまでに、かれはクラコウに「強制収容所歌曲文庫」Das Konzentrationslagerlied-Archiv in Krakowを設立し、約52,000米のテープレコーダーによる記録、10,000枚のマイクロフィルムによって、強制収容所における創作詩、400曲をこえる、とくにポーランド語のうた、各種記録を整理した。<sup>2)</sup>

回教徒と呼ばれる、すでに生理的には人間の廃虚と化した一群の人々がいた。Kulisiewiczはこの人々のうたを作詩した。このMuselmann-Kippensammlerのうたのメロディーは、1938年に、かれが属していたドイツの「クローネ」というサークルでうたわれていた時事風刺歌「シャンハイ」Schanghaiからとり入れた。(このサークルにはドイツの少女、17歳のAliceがいて、かれに恋した)。このうたに関してはのちに再び触れるが、このうたは、戦後世界中に知れわたった。チェコスロヴァキア、イタリア、ドイツ民主共和国、イングランド、スコットランド、ドイツ連邦共和国などの各々何十ヶ所で演奏され、またパリ、モスクウ、ルクセンブルクの大都市でも演奏された。メキシコ・シティ、ブリティッシュ・ブロード・キャスティング、モスクウ、ベルリン(東)、ローマ、コーペンハーゲン、ベルン(レートロマ

ン語)、ルクセンブルク、東京などのラジオ放送を通じて放送された。また、ローマ、パリ、スヴィエトロウスクなどからレコード盤で売りだされている。<sup>3)</sup>

貴重な記録として 1972 年(著書序言日付)に音楽学者の Carsten Linde により Kulisiewicz のレパートリーから小冊子で選集がだされた。<sup>4)</sup>「強制収容所歌集。ポーランドの歌手 Alex Kulisiewicz のレパートリーから」KZ-Lieder. Eine Auswahl aus dem Repertoire des polnischen Sängers Alex Kulisiewicz, hrsg. v. Carsten Linde, Verlag Wendepunkt, Sievershütten [Vorwort 1972]. がこれである。これについて、本稿では紹介をしたいと思う。

## 注

- 1) 「強制収容所歌集。ポーランドの歌手 Alex Kulisiewicz のレパートリーから」——以下 KZ-Lieder—— 8～9 頁。

- 2) KZ-Lieder 10 頁。

1974 年 8 月 14 日付の本稿の筆者あて Kulisiewicz の書簡——以下書簡——によれば、この Archiv はさらに整備された。

|           |                           |
|-----------|---------------------------|
| テープレコーダー  | 52,000 米                  |
| マイクロフィルム  | 14,000 枚                  |
| ポーランド語のうた | 540 曲以上                   |
| ポーランド語の詩  | 7,500 頁以上 (37 基幹・支所収容所より) |
| 絵画        | 800 枚                     |
| 其他関連文献    | 714 冊 (紙バサミ) 80,000 頁。    |

- 3) 書簡 8 月 14 日付。

- 4) 同上。1973 年にドイツ国民党 NPD は、この種のうた 100 曲以上を買い、ハイデルベルクの夜の集会で焼く儀式を行っている。

本書は、ドイツ工業規格 A 5・50 頁の小冊子で、限定 200 部——本稿筆者の手元にはその第 64 番がある——の出版である。1968 年 10 月 5 日の Kulisiewicz の演奏の記録をもとに Helga u. Carsten Linde が編集をした<sup>5)</sup>。14 枚の挿絵と写真がある。楽譜は 6 枚である。

Carsten Linde は演奏における Kulisiewicz の様子をこう述べている。

「アレックスが聴衆の前にたって、——心もちの猫背で、両手にギターをもち——、しずかな声で語りかけると、人々は今かれがあのにまわしいさまざまな思い出、さまざまな情景の思い出に苦悩していることがわかる。最初のうたをうたい終ったとき、この人がうたいながら如何に悩み、また人生の最後をこのうたに捧げている姿勢に人々は気がつく、…」。<sup>6)</sup>

### 注

5) KZ-Lieder 6 頁。

6) KZ-Lieder 10 頁。

以下掲載のうたを順を追ってみる。

## 1. 「地獄の奥底からのコラル」Choral aus der Tiefe der Hölle

テキスト Leonhard Krasnodebski (1942 年)

曲 Alex Kulisiewicz (1944 年)

hört unseren choral  
aus der tiefe der hölle !  
er soll unseren henkern  
auf ewig die träume stören !  
choral, choral !  
aus der tiefe der hölle,  
er soll unseren henkern  
die träume stören...  
die träume stören,  
für immer die träume stören !

hört unseren choral !  
hört doch unseren choral !  
aus der tiefe der hölle...

attention ! attention !  
 hier krepieren menschen,  
 auch hier sind MENSCHEN !!<sup>7)</sup>

(仮訳) おれたちのコラールを聴け  
 地獄の奥底からの！  
 おれたちの刑吏を  
 永久にねむらせないのだ！  
 ねむらせない…  
 ねむらせない、  
 永久にねむらせない！

おれたちのコラールを聴け！  
 おれたちのコラールを聴くのだ！  
 地獄の奥底からの…  
 注意せよ！ 注意せよ！  
 ここでは人間が動物として葬られる、  
 ここにいるのは「人間」なのだ!!

1942年に、収容所内で詩人としてみなに愛されていた当時24歳の Leonhard Krasnodebski がこのテキストを創作した。1943年に Krasnodebski が自殺を強制され死んだその一年後——1944年、Kulisiewicz が曲を付した。

Krasnodebski ははじめトロツコ作業隊に入っていたが、この作業隊員は作業中休むことなくうたうたを強制され、「うたう馬」die singenden Pferde とよばれていた。たとえば「われらは来た、愉快的歌手、何千の挨拶をおくる…」といったうたをうたわされた。Krasnodebski はのち衛生室で働かされ、「人体実験」の成果を毎日観察する仕事をさせられた。この実験の責任者は、ベルリン刑事警察の Dr. Wittmann と収容所医師の Christian Schmitz である。当時の記録は、「当時のザクセンハウゼン」Damals in Sachsenhausen,

Kongress Verlag, Berlin に掲載されている。

Leonhard Krasnodebski は、この実験の情景をもとにこのテキストをつくった。かれはこの実験のありさまをあまりに多く見、知りすぎたために自殺を強制された。1944 年 Kulisiewicz 自身がこの実験に供せられることになったとき、Krasnodebski を思い出し作曲した。丁度 Krasnodebski の逝去の 2 回忌であった。このうたは、ユダヤ人作曲家 Rosebery d'Arguto (: Martin Rozenberg, 1890—1943) に献じられた。ザクセンハウゼン収容所では四ヶ国語でうれわれた。<sup>8)</sup>

7) KZ-Lieder 13 頁。

8) KZ-Lieder 12 頁。

## 2. 「ユダヤ人の死のうた」 Jüdischer Todesgesang

収容所に適した編曲とテキスト編成 Rosebery d'Arguto

曲 ユダヤ民謡「10 人の兄弟」 tzen brider より

1. bom... bom... bom... bom...

.....

li-lai...li-lai...

bom... bom... bom... bom...

zehn brüder sind wir damals gewesen,

haben wir gehandelt mit wein.

einer ist gestorben -

wir sind geblieben neun.

oi - joj !

Jidl mit der Fiedel,  
mojschje mit dem bass,  
sing ' mir mal ein liedel!  
müssen wir ins gas !  
ins gas !  
ins GAS !

bom... bom... bom... bom...

2. ein bruder bin ich nur noch geblieben,  
mit wem soll ich nun weinen ?  
die and'ren sind ERMORDET !  
denkt an alle neun !  
oi-joj ! oi-joj !

jidl mit der fiedel,  
mojschje mit dem bass,  
hört mein letztes lied:  
ich muß auch ins GAS!

jidl mit der fiedel,  
mojschje mit dem bass...  
hört mein letztes lied:

zehn brüder sind wir einmal gewesen,  
wir haben keinem leid angetan ...

.....

li-laj...li-laj...li

li-laj...li-laj...li

la-la-la-la...la-la

(ALLES R - RAUS !)

(仮訳) 1. 5行目より8行目, 10行目より15行目まで。

その頃おれたちは10人の兄弟だった,  
そしてワインを商っていた。  
一人が死んだ——

おれたち残りは9人となった。

イードルはヴァイオリンで,  
モイシェはコントラバスで,  
うたってきかせてくれ!

おれたちゃガス室へ行く！  
 ガス室へ！  
 「ガス室」へ！

2. 1行目から4行目, 6行目から14行目まで。

兄弟の一人残っているのはおれだけだ,  
 一緒に泣いてくれる者はいないのだ?  
 みな「殺され」てしまった!  
 九人を忘れまい!

イードルはヴァイオリンで,  
 モイシェはコントラバスで,  
 おれの最後のうたを聴いてくれ:  
 おれもガス室へ行くのだ!

イードルはヴァイオリンで  
 モイシェはコントラバスで…  
 おれの最後のうたを聴いてくれ:

おれたちの兄弟はむかし 10 人だった  
 おれたちは誰にもわるいことをしなかった…  
 .....

(全員 でっ でろ!) <sup>9)</sup>

Rosebery d'Arguto は、1922 年ベルリンのノイケルン労働者合唱団(男声ー  
 および女声合唱団)の指導者をひき受け活躍していたが、1940 年にザクセン

ハウゼン強制収容所に入れられた。かれは非合法的なユダヤ人合唱団を創立した。この「ユダヤ人の死のうた」は四部合唱で、10詩節からなるユダヤの民謡「10人の兄弟」*tzen brider* をd'Argutoが2詩節に縮小し、ドイツ語で表現したものである。それは大勢の、ともに拘禁されている人々によく理解されるためである。またたとえば原詩で「ガスのまっただなか」*oifn mitn gass* は「われわれはガス室に行かなければならない」*müssen wir ins gas* にかえられた。

d'Argutoのコーラスでは約25人の拘禁者がうたった。その中には8歳から12歳までの子供が4人いた。Kulisiewiczは最後のコーラスについて報告している、「第38棟は、ちょうど空襲の警報時のように窓も戸も覆いで遮蔽されていた。ここでd'Argutoは合唱を指揮していた。突然SS隊員が『全員でろ!』と叫びながら中に入ってきて、この作曲家とうたっている拘禁者を点呼場にかりだした。そこでかれらは一晩中拷問をうけつづけ、凍えてうたいつづけた。そして半裸のまま錯乱状態でくりかえしくりかえし“*li-laj!-li-laj! li!*”とうたいつづけなければならなかった」。10月末に全コーラス員がアウシュヴィッツ-ビルケナウに連れ去られていき、そこでガスにより殺された。4人の少年は実験によって死んだ。Rosebery d'ArgutoはAlexに、最後の合唱の前に、間近い死を予感しながらこう言った、「ねえアレクス、これはわたしの訴えの、復讐のうたです——わたしの遺言です。君はユダヤ人ではないが、このうたを世界中で演奏しなければならない——さもなければ君は静かに死ぬことはできないよ」。強制収容所のどんなうたをみても、ガス室での死をこれほど直接に迫力をもって予見しているものはない。死のうたの個々の部分は、さまざまな声でうたうことによって解釈を与えることができる。(バスは死の警告、子供の声は生命感の喜々とした表現——そこに「おれたちはガス室に行く!」という叫び声を入れる)。そして対比を明らかにする。<sup>10)</sup>

## 注

9) KZ-Lieder 16頁。

10) KZ-Lieder 15頁。

### 3. 「火葬場の小さな息子のための子守うた」 Wiegenlied für meinen kleinen Sohn im Krematorium Treblinka 1942

テキスト      Aron Liebeskind  
曲              Alexander Wertynski (1915)

このうたは、1942年にユダヤ・ドイツ語からポーランド語に Kuliciewicz に  
よって訳されてもいる。

1. schwarz und stumm steht das krematorium,  
die pforte der hölle mit haufen von leichen.  
schlüpfrige, steife leichen schlepe ich -  
ich ergraute über nacht.  
da liegt mein söhnchen - mein söhnchen ...  
in die lippen hat es die kleinen fäustchen eingebissen.  
wie kann ich DICH hier ins feuer werfen  
mit deinen schönen goldenen löckchen ... !?
  
- lulle, lulle ein - mein söhnchen      ...  
lulle, lulle ein - mein söhnchen      ...  
lulle, lulle ein - mein söhnchen      ...  
mein liebes söhnchen
  
2. niederträchtige sonne, warum schweigst du ?  
ich habe doch alles genau gesehen:  
sein köpfchen zerschmetterten sie  
an der steinernen mauer ...  
in den himmel starren deine stillen äuglein  
und noch weinen deine erkalteten tränen ...  
mein söhnchen ...! überall, überall, sehe ich dein blut !!  
du lebstest doch nur drei kurze jahre ...
  
- lulle, lulle ein - mein söhnchen      ...  
lulle, lulle ein - mein söhnchen      ...  
etc.

(仮訳) 1. 夜のやみに黒くおしだまる火葬場,

地獄の入口に積み重なる死体。

もちあげにくく、かたくなった死体をわたしはひきずる——

わたしは一晩で白髪になった。

そこにわたしの息子がいた——わたしの息子が…

口唇に両手をにぎってくわえていた。

わたしがここでお前を火の中に投げ入れることがどうしてできよう

美しい金のまきげのお前を…!?

lulle …以下略



## 2. 陰陰なる太陽よ、なぜ黙っているのか？

だがわたしはすべてをたしかにみた：

この子の頭をかれらはめった打ちにくだいた

石の壁にぶつけて…

もの言わぬ目は天をじっとみて動かない

そして冷えた涙は泣いている…

わが息子よ…！ どこもかしこも血だらけになっている！

お前は三年の短い命を生きただけだった…

lulle …以下略

(ゲルトウルト・デーゲンハルト作)

——KZ-Lieder 19 頁掲載——

mf RUBATO

riten. --- dolce

1. riten. --- atempo

2. riten. ---

トレプリンカ 1942 年

この衝撃的な「子守りうた」はトレプリンカ絶滅収容所（ワルシャワより約 80 km はなれたところ）で生じた。13 ヶ月間にトレプリンカで 75 万人以上の子供、婦人および男性が殺された。どういうあざけりの言葉によって犠牲者たちが死の直前に欺かれたのか、Liebeskind は描きだしている。「収容所にはいたる所『心から歓迎』という標語が立てられていた。人々にその運命について気をもませるため、かれらは『駅』を設けた。そしてそこで確実な乗車券を発行したのである。出発前にすべての被拘禁者は『身を清め』なければならなかった。かれらは薔薇の遊歩場をとおり火葬場へと歩んだ。子供たちは母親たちから離された。この間『お母さんは間もなく帰るんだよ』といううたのメロディーが流された」。

「子守りうた」の创作者は、24 歳の Aron Liebeskind という、ル布林近郊出身の時計工であった。死体の運搬が収容所におけるかれの仕事であったが、かれは妻の Edith と三歳の息子の処刑を目のあたり見ることを強制された。

かれはこの子を次の日には火の中に投げこまなければならないことを知ってはいたが、子供を死体の山の下にかくしておいた。その夜かれは「火葬場の小さな息子のための子守りうた」を書いた、——次の朝かれの髪は真白になった。間もなくかれはトレプリンカを脱出することに成功し、Goldfisch という名前でドイツに住んでいた。後にかれはつかまりオラーニエンブルク・ザクセンハウゼン強制収容所に引きわたされた。かれはそこで Kulisiewicz と道路清掃夫として働らいていた。Liebeskind は巨人のような大男であったが、内面的に破滅し、半ば狂っていた。かれはいつもなにかぶつぶつ言いながらごみをかきまわしては自分の子供をさがしていた。Alex はこの子守りうたを他の言葉に訳した。こうしてトレプリンカにおける出来ごとをしっかりと記憶にとどめておこうとしたのである。Aron Liebeskind は Rosebery d'Arguto の合唱団でうたっていたが、1943 年にこの合唱団の人々とともにアウシュヴィッツ・ビルケナウで殺された。<sup>12)</sup>

注

11) KZ-Lieder 20 頁。

12) KZ-Lieder 18 頁。

4. 「1944 年十字架にかけられた人」 Der Gekreuzigte 1944

テキスト Alex Kulisiewicz (1944 年)

曲 Alex Kulisiewicz (1944 年)

sie kreuzigten des menschen söhnchen !

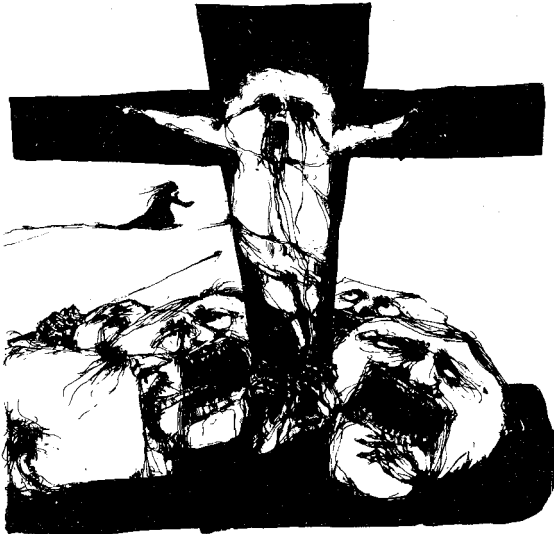
sie kreuzigten ein wehrloses kind !

mit einem langen nagel stachen sie ihm die augen aus.

sie rissen die zunge heraus - zerschmetterten den kopf.

die mutter - die sterbende - mußte es mitansehen:

an die tür nagelten sie die beiden händchen ... !



du schreist nicht, christus: ECCE HOMO !  
 über die unaussprechlichen qualen des Kindes.  
 sie beten - es beten die mit blut befleckten hände,  
 die mit blut befleckten hände.  
 höre, du christ:  
 DEIN söhnchen hat man gekreuzigt !

(ゲルトゥールト・デーゲンハルト作)

——KZ-Lieder 23 頁掲載——

(仮訳) かれらは人の息子を十字架にかけた！  
 かれは抵抗力のない子供を十字架にかけた！

かれらは長い釘で子供の目をえぐりとった。  
 かれらは子供の舌をひきぬいた——頭をめった打ちに碎いた。  
 母は——母も死んだが——黙ってみていなければならなかった：  
 かれらは両手を戸に釘でうちつけた…！

あなたは泣き叫ばない，キリストよ：十字架のキリストよ！  
 言葉には言い現わし得ない苦しみ，子供の苦しみをみて叫ばない。  
 かれらは祈る——血によごれた手が祈りをする，  
 血によごれふ手が。  
 聴け，キリストよ：  
 あなたの息子をかれらが十字架にかけたのだ！<sup>13)</sup>

1944年9月あらたに引きわたされたフランス人の被拘禁者たち（いわゆる「到着者」）が、ニッサ近郊プレスルにおける凶行について報告した。SS隊

はその地で、1944 年 7 月 20 日、パルチザンの攻撃に対する復讐としてある家の戸に 3 歳の子供を磔にした。被拘禁者たちの多くは、これはフランス人たちの一種の残虐な話の宣伝だと思った、それほどこの事件は人には信じられない犯行であった。Alex Kulisiewicz は、この未知の小さな「ニッサのキリスト」をうたったうたを、Alex Alicouli というペンネームを用い、フランス語の題名「十字架を負った人」le crucifié をつけて作った。戦後になって、かれは、この磔事件が実際にフランス人たちが語ったとおりであった、ということを確認することができた。(参照：Trial of the major war criminals before the international military tribunal, Nürnberg 1945–1946, Bd. VI, p. 406)。

Kulisiewicz は、「人の息子」という言葉をラテン語の「神の子、キリスト」*filius dei* の対概念として用いている。この両方とも人々は十字架にかけた。だがニッサの小さなキリストは知られないまゝであった。若いフランスのヴァイオリニストで詩人、グルノーブル出身の Roland Tillard はこのテキストをフランス語に訳した。メロディーの方は、Alex がもともと戦前にあるベルギーの映画でうたったものである：「君は今日わたしを想う？」*tu dois penser aujourd'hui à moi?* Tillard は、1945 年 5 月 1 日、ベルリン近郊のヴィットシュトックで、いわゆる「死の行進」中に射殺された。かれは 14 歳のポーランドの少女で共にとらえられていた Danusia Radziejowska を S S 隊からかばおうとしたのであった。二人が射殺されるとき、S S 隊の殺人者は他の被拘禁者にむかってこう言った：「よくみやがれ、この犬ども！」。<sup>14)</sup>

#### 注

13) KZ—Lieder 24 頁。

14) KZ—Lieder 22 頁。

## 5. 「生ける石」 Die lebenden Steine

テキスト Włodzimierz Wnuk (1941 年)

## 曲 Alex Kulisiewicz (1943 年)

1. wir sind die lebenden steine,  
harte und nackte felsen.  
wir schwitzen bei sonne und schlägen  
im steinbruch mauthausen-gusen.
2. wir sind die lebenden steine,  
obdachlose steine.  
uns küssen keine flüsse,  
uns tötet verfluchte hitze.
3. wir sind die lebenden steine,  
im schatten der teufelsfahne.  
im herzen die schwelende lunte  
und täglich mehr dynamit!
4. wir sind die lebenden steine,  
aus der tiefe der hölle.  
wir sklaven, müssen doch glauben  
an menschen,  
menschen  
und liebe.

(仮訳) 1. おれたちは生ける石, 石, 石,

固いはだかの岩。

おれたちは汗をかく, 陽も照りまた殴打も受け,  
マウトハウゼン—ゲーゼンの石切場で。

2. おれたちは生ける石, 石, 石,

野天にさらされた石。

おれたちに口づけする水の流れもなく,  
おれたちをのろう暑さが殺す。

## 3. おれたちは生ける石, 石, 石,

悪魔の旗の影に覆われている。

心の中には火縄がくすぶり

日を追ってますます爆薬がくすぶる。

## 4. おれたちは生ける石, 石, 石,

地獄の奥底からでてきた石。

おれたちは奴隷だ, だが人間を信ずる

人間を

そして愛を。<sup>15)</sup>

*mf* GRAVE

① Wir sind die le-ben-den Stei-ne, nack-te und har-te  
 Fel-sen; wir schwit-zen bei Son-ne und Schiä-gen im  
 Steinbruch Maut-häusen-Gusen. ② Wir sind die le-ben-den  
 Stei-ne obdach-lose Stei-ne; uns küssen keine Flüsse, uns  
 totet ver-fluchte Hitze. ③ Wir sind die lebenden Stei-ne im  
 Schatten der Teufels-fahne! Im Herzen die schwelende  
 Lunte und täglich mehr Dyna-mit! ④ Wir sind die lebenden  
 Stei-ne aus der Tiefe der Hölle; wir Sklaven müssen doch  
 glauben an Menschen und Menschen und Liebe...

*STENATO poco rall.---*  
*mp quasi cecit.*  
*LEGATO P sotto voce*  
*mf poco animato sonore f*  
*ff rall.--- mp Temp. dolente*  
*teneramente*  
*P quasi rect* Fine

絶滅収容所のマウトハウゼン—グーゼンには石切場があり、被拘禁者たちはそこで働かなければならなかった。かれらは作業の結果土と汗にまみれ、遠くから石か人間か見分けがつかなかった。この理由と、何時何如なるときにも監督官によって石切場のなかに突きおとされるという運命にあったので、人々はいかれらを「生ける石」となづけた。ある被拘禁者は、SS隊員がどのように被拘禁者を碎石機の中になげこんだのかを語っている。SS隊員はこの被拘禁者が、隊員の近くで脱帽しなかった、というたゞそれだけの理由で殺してしまったのである。Włodzimierz Wnuk は、カトリック詩人であった。かれの書物「われは汝とともにあり」はポーランドで知られている。Wnuk の言葉は、チェコ語、イタリア語、セルビア語、ノルウェー語およびドイツ語に翻訳されている。こゝに掲載されたうたには、いろんな詞型がある。Alex Kulisiewicz はこのメロディーを作曲した。<sup>16)</sup>

## 注

15) KZ—Lieder 28 頁。

16) KZ—Lieder 27 頁。

## 6. 「おゝ、わがブーヘンヴァルトよ」 Oh du mein Buchenwald

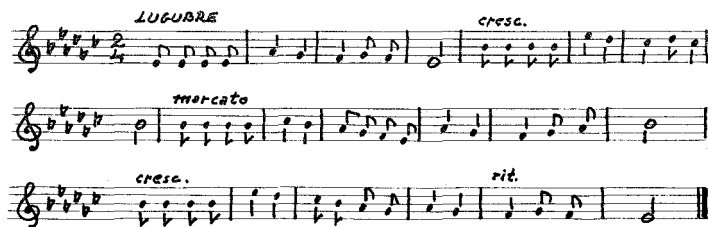
テキスト Stanislaw Targowski (1945 年)

曲 ポーランドの兵士のうた 「おゝ、わがローゼマリー」  
o, moj rozmarynie

1. oh du mein buchenwald, verfluchte saat !  
warum mißhandelst du mich und machst mein junges leben kaputt?  
wir fragen dich !
2. was habe ich den deutschen getan ?  
vierzehn jahre war ich alt, als ich sie in warschau  
ihr "heil !" rufen hörte.

3. meine mutter prügeln sie – ich weinte hilflose tränen.  
sie aber blieb ruhig, als wolle sie sagen:  
vergiß das nie !
4. meinen vater zerfleischten im kz die hunde,  
damit sie stärker und größer  
hitlers sieg feiern konnten.
5. tausenden von kindern raubte deutsches gas den atem.  
was hatten euch die wehrlosen säuglinge eigentlich getan ?  
antwortet !

- (仮訳) 1. おゝ、わがブーヘンヴァルトよ、いまわしきこと、  
何故お前はわたしをいじめ、若い生命を絶とうとするのか?  
お前にきく!
2. わたしがドイツ人に何をしたというのか?  
14才のときであった、わたしがワルシャワで  
かれらの「万才!」の叫びを聴いたのは。
3. わたしの母さんをかれらは殴打し——わたしはなす、べなく泣  
いた。  
母は動かなかった、かの女が  
これを忘れるな!、と言おうとした時には。
4. わたしの父を強制収容所の犬たちはずたずたに引き裂いた、  
こうしてかれらは盛大に  
ヒトラーの勝利を祝うことができた。
5. 何千の子供たちの息をドイツのガスは止めた。  
この無力な乳飲み子たちが何を一体お前たちにしたというのか?  
答えよ!<sup>17)</sup>



1944 年にワルシャワ出身の Stanislaw Targowski が、第一次大戦時のポーランドの兵士のうたのメロディーをかりて、このうたを作った。内容は、何故殺戮が行われるのか、と問うている。

Targowski は、1945 年 3 月に 16 人のドイツ人の抵抗運動参加者とともに絞首刑に處された。

#### 注

17) KZ—Lieder 37 頁。

18) KZ—Lieder 30 頁。

### 7. 「強制収容所—愛のうた」KZ—Liebeslied

テキスト・メロディー Zofia Karpinska (1943 年)

1. draußen steht eine bange nacht.  
die zeit flieht – der flieder blüht ...  
hinter dem siebenten berg bist du.  
draußen steht eine bange nacht,  
die zeit flieht – der krieg dauert an ...  
hinter den drähten warte ich.
2. mein herz sehnt sich nach dir  
und weint lange, lange;  
hierher zu uns – hinter die drähte  
fliegt kein vogel.  
draußen steht eine bange nacht  
die zeit flieht – der krieg dauert ...

hinter den drähten krepieri ich,  
krepieri ich . . .

(仮訳) 1. 外はぶきみな夜。

時はすぎ去る——リラの花は咲き…  
手のとぎかないかなたにあなたはいる。  
外はぶきみな夜。  
時は流れる——戦はつづき…  
電線のこなたにわたしは待つ。

2. わたしの心はあなたにこがれる

そして泣く、ながく、いつまでも  
わたしたちの所に——電線のこなたに  
鳥もとんでは来ない。  
外はぶきみな夜。  
時は流れる——戦はつづき… (?)  
電線のこなた  
電線のこなたでわたしは斃れる,  
斃れる。<sup>19)</sup>



絶滅収容所マジヤメク（以前のルブリン収容所）で、1943年このうたが作られた。1941年から1944年までの間にマジヤメクでは36万人の人々が殺

された。大抵は餓死であった。Zofia Karpinska のうたは、大抵はもの悲しい陰うつな強制収容所のうたにくらべてみればその反対である。被拘禁者たちが毎日火葬場を目のまえに見なければならなかったにもかかわらず、かの女は人間愛と人間に対する信頼を失なわなかった。この信仰はかの女に勇気を与え、拷問やSS隊の策略に耐える力を与えた。

女教師であった Zofia Karpinska はかなり多くの強制収容所のうたを作った。それは簡単な言葉であったが、しかし収容所内に流行するうたにはならなかった。Zofia は、つぎつぎとマジャメク、ラーフェンスブリュックおよび外部使役の収容所にたらいまわしされた。

かの女は1973年——ほとんど盲目となって——ワルシャワで死んだ。<sup>20)</sup>

#### 注

19) KZ—Lieder 33 頁。

20) KZ—Lieder 32 頁。

### 8. 「強制収容所」 Kazett

テキスト Alex Kulisiewicz (1942 年)

曲 Jan Stefani (1794 年)

das kazett gleicht einem bösen, bösen hund:  
sein ruf ist furchterregend.  
wozu denn noch leichen gegenüber  
die krautjunker-geste . . .  
im zebrakleid ist doch alles scheißegal !

hier nützen uns keine diplome mehr  
(auch der herr bischof muß das scheißhaus fegen!)  
ob trossknecht oder general -  
hier wirst du nicht zum nabel der welt !

la - la - la . . .  
 la - la - la . . .  
 la - la - la . . .  
 (auch der herr bischof muß das scheißhaus fegen !  
 genauso wie ich . . .)  
 jum - pa! di - di - da!  
 di - di - da! di - di - da!  
 jum - pa! di - di - da!  
 jumpa!  
 ob trossknecht oder general -  
 hier wirst du nicht zum nabel der welt !

(仮訳) 強制収容所はたちの悪い犬のようなもの  
 叫び声は恐ろしい。  
 一体何で死体にむかって  
 ユンカー野郎の身振り…をするのか…  
 しまの服を着たのでは皆同じ！

こゝでは何の免状も役に立たぬ  
 (司教様も便所の掃除をしなければならぬ！)  
 担ぎ人夫も将軍も…  
 世間のぬしというわけには参らない！

la—la—la…

3 行略

(司教様も便所の掃除をしなければならない)。

Jum - pa! di - di - da!

4 行略

担ぎ人夫も将軍も——

世間のぬしというわけには参らない！<sup>21)</sup>

この Alex Kulisiewicz によって作られたうたは、1942 年 5 月 1 日はじめてザクセンハウゼンの名士収容棟 Nr. 2 の夕べの集りでうたわれた。居合わせた名士にとって、教育的な集りであった。しかし全体の集会の空気としてはその人々に対してきみがよいという所であった。名士の中には、今日のコンツェルンの主 Renault, Hohenberg von Habsburg 侯爵、それからチェコスロヴァキアの将軍 Ruzicka などがいた。同時にこのうたによって、「しまの服を着たのでは皆同じ」なのだから、連帯性のみが被拘禁者にとっては重要なのだということが語られた。

1937 年から 1944 年までの間に、多くの政治活動家がザクセンハウゼン強制収容所に引きわたされた。このなかには、首相 Kurt von Schuschnigg、バイエルンの皇太子 Albrecht von Bayern、フランスの首相 Raul Reynaud などが居た。この名士の被拘禁者たちも普通の被拘禁者とみなされていたが、この人たちは仲間にしばしばその出身や階級によって自分は偉いのだという印象を与えようと試みた。二人のカトリックの司教（ルブリンの Goral と Fulmann）も、クラコウの大学の 68 人の拘禁されていた教授たちとともに、収容所の労役に引きずりだされたのであった。<sup>22)</sup>

#### 注

21) KZ—Lieder 37 頁。

22) KZ—Lieder 35 頁。





9. 「回教徒—もく拾い」<sup>23)</sup> Muselmann-Kippensammler

テキスト Alex Kulisiewicz (1940 年)

曲 時事うた「シャンハイ」より (1938 年)

ein untermensch – pollak bin ich nur, ein heide.  
alle halten mich hier für dreck,  
sie trei- trei – treiben mich an.  
(aj- aj- aj).

ich dagegen, liebe schufte,  
ich achte sie alle sehr.  
ich a- a- achte sie sehr  
(mit dem a, wie bei arsch.  
aj- aj- aj).

vorne trage ich den roten winkel;  
und hinten ein gelbes  
pfui, beschissenes hakenkreuz.

muselmann ! muselmann !  
ich möchte dir in die schnauze hauen.  
kippen schmatzt du, mein herr.  
muselmann ! muselmann !

wenig ss-fußtritte und viel brot,  
 so viel, daß man es gar nicht auffressen kann.  
 heil-li! heil-li! ss-halunken!  
 quatsch nur weiter, mein führerlein . . .  
 oh, du mein gott! geht's mir denn schlecht?  
 verflucht, verdammt sei mein vorarbeiter!  
 mein blut soll ihn schon heute ersticken!  
 muselmann! muselmann!  
 du bist doch ein großer mann . . .  
 was bist du für ein großer mann.

(仮訳) 下等な人間——ポーランド野郎だわたしは、回教徒。

みなこ、ではわたしをつまらない奴と思っている、  
 やつらはわたしを追い立て仕事をさせる。

(アイウエオのアの発音で

あ、—あ、—あ、)。

わたしはだが、愛し、あくせく働く  
 わたしは、あ、かれらをととても尊敬しているのに、  
 あたしは そーそーそんけいしている、人々を、  
 (あ、—あ、—あ、)。

わたしは胸に赤い三角を；  
 背中には黄い十字を  
 チェツ、いまいましい鉤十字の。

回教徒！ 回教徒！

一発君のあごにくれてやりたい、

すいがらを君はむしゃむしゃと食べてしまう、君は。

回教徒！ 回教徒！

SSの野郎はろくに働らきもせず、どっさりパンを手に入れる、  
多くてたべきれないほど。

ハイーリ！ ハイーリ！\* SSのよた者！

ばかばかしい、やらせておけ、総統のお父つぁ…

おゝ、神さま！わたしはどうなるのでしょうか？

くそいまいましい職長め！

わたしの血で今日はきっと奴の息の根を止めてやる！

回教徒！ 回教徒！

だが君は偉大な男だ…

君は何と偉大な男だろうか。<sup>25)</sup>

\*「ハイル」という挨拶を指す。

「回教徒」というのは収容所の隠語であって、飢え果て、体重も70～80ポンドとなりもう殆んど生きてゆけなくなった人々を指す。この人たちは自分がもう無価値な存在だというコンプレックスにとりつかれ、実際自分を下等な人間だと信じ込んでいた。Kulisiewiczのうたは、その状況において、他の被拘禁者たちとの対等と連帯の気持ちをこの人たちに与えようと試みた。この人たちを物理的に支援するものはなにもなかった。この人たちはすでに無感覚になっていたし、調達すべき食糧もなかった。<sup>26)</sup>

#### 注

23) 書簡 1974年8月14日 付。

いわゆる Muselmänner は、完全に飢餓に陥り、収容所の棟と棟との間をもう殆んど無意識無感覚になってさまよい、煙草の吸いがらを集めたりしている人のことである。それをパンとか一杯のスープとかと交換するのである。Kippensammler という言葉は外国語には翻訳しがたい。イタリア語では Musulmano Raccattacicche と訳されている。

24) KZ—Lieder 40頁。

25) KZ—Lieder 39頁。

26) 書簡 1974年8月14日付。

補遺 「回教徒—もく拾い」 第二番。<sup>27)</sup>

hinter'm stacheldrath scheint die sonne  
 hinter'm stacheldrath springen die kinder—  
 und auf dieselben stacheldrath steckt eine schwarze, traurige leiche.  
 u-u-uuu !

dünn bin ich, sehr dünn ! ...  
 sehr leicht und halb-idiot ...  
 im bauch knurren die leeren gedärme - hier:  
 u-u-uuu ...

vielleicht bist du ein italiano,  
 vielleicht ein iwan  
 oder mojsche, du ? ...

muselmann, muselmann ! ...  
 bruder, gib mir die schnauze,  
 mein armer bruder, du ...  
 muselmann, muselmann ...  
 die augen erlöschen, blau sind meine lippen,  
 aus dem kinde ... asche ! ... einen gott gibt es nic t !!  
 jupaidi ! ... jupaida ! du blöder schwächling ! ...  
 j-jupaidi ! ... jupaida ! ... ich tanze ja ...  
 ich kotze warmes blut.  
 schaut mich an,  
 schaut, menschen !  
 wie unter M E N S C H E N schändlich ist mein krepieren ...  
 muselmann ... muselmann ...  
 mutti, meine mutti,  
 lass mich ruhig sterben ...  
 .....<sup>27)</sup>

(仮訳) 鉄条網のかなたに太陽は輝く

鉄条網のかなたに子供たちははねまわる——

だが鉄条網には黒くこげた、悲しげな死体がひっかかっている。

うーうーううう！

わたしはやせほそっている、とてもやせている！...  
とても軽くなってそしてなかば白痴となってしまった...  
腹のなかでは空になった臓腑がなっている——こゝゝ  
うーうーううう...

君はイタリヤ人か、  
あるいわ君はイワン(ロシヤ人)か  
モイシェ(ユダヤ人)か、君は？

回教徒、回教徒！...  
兄弟よ、わたしのあごに一発くれたまえ...  
わたしの可愛そうな兄弟よ...  
回教徒、回教徒...  
目は光を失い、唇は色あせた、  
子供を焼いて... 骨にしてしまう！... 神ももう存在はしない！！  
ユパイディ！... ユパイダ！低能のよわむしょ！...  
ユーユパイディ！... ユパイダ！... さあわたしはおどるよ...  
わたしは生血を吐く。  
わたしをよくみよ、  
みよ、お偉い方々よ！  
何という恥辱、このお偉い人々の目の前でたれ死にするのは...  
回教徒... 回教徒...  
お母さん、わたしのお母さん、  
静かに死なせて下さい...  
.....

注

27) 書簡 1974 年 8 月 14 日付。

(昭和 50 年 5 月 14 日受理)